

2023年5月15日（月）

老球の細道730号

スポーツで豊かな国へ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1993年5月15日に誕生したサッカー・Jリーグは明日で30歳を迎えるという。地域に根ざしたスポーツクラブを作り、いつでもスポーツを楽しめる場所を全国に作ることを理念とした。それがワールドカップで優勝することよりも大切であると創設に尽力した初代チェアマン川淵三郎氏は語る。

日本サッカーにJリーグができたおかげで、それまでは夢だったワールドカップ出場があたりまえになり、今では世界トップレベルを脅かす存在となっている。創設時は10クラブだったのが今はJ3を含めると60にもなっている。観客動員は平均2万人弱で、プロ野球と並ぶ存在になりつつある。

Jリーグ誕生後の日本のスポーツ事情も色々変化した。サッカーくじが合法化され、その収益で指導者の育成、グラウンドの芝生化、地域のスポーツ施設の整備など日本のスポーツ振興に利用されている。スポーツ基本法が制定されスポーツの推進は国の責任となった。それを具現化するためにスポーツ庁が創設された。Bリーグ創設もJリーグの影響大である。

しかし、これだけ今までにないスポーツ盛況の下地ができたのにもかかわらず、Jリーグが目指す「いつでも誰でも気軽にスポーツを楽しむ」ことは達成されたのかというとそうでもない。笹川スポーツ財団の調査によると、1993年以降から2022年までの「週1回以上の運動、スポーツ実施率」「スポーツクラブ、同好会、チームへの加入率」「スポーツボランティアの実施率」などは横ばい、または減少化を記録している。

東京五輪、東京パラの影響も同じである。柔道で金メダルをたくさんとっても柔道に取り組む子供たちは増加しないと柔道家は嘆く。バスケットボール女子が銀メダルをとってもミニ、中学、高校と女子部員が増加したという話は耳には入ってこない。むしろあちこちで部員数の減少で廃部の危険ありという残念な話は聞こえてくる。トップアスリートの活躍が一般市民、子供たちのスポーツ行動にそれほど影響を与えていないということである。

トップアスリートやプロスポーツだけの隆盛を良しとすれば、「スポーツで豊かな国へ」という理念は絵に描いた餅で終わるだろう。草の根でスポーツを楽しむ人達の数を増やすことが急務である。そのためには日常気軽にスポーツができる場所をたくさん作る。それらを作るスポーツ庁の予算を増やすべきである。具体的には、校庭の芝生化、廃校を活用して体育館を貸し出しする、学校施設（高校も）を開放する、子供たちが自由に遊べる芝生の広場、ボールなどを自由に使える公園（バスケットのゴールがあちこちにある）を作る。これらの充実が結果的にトップアスリートを生む土台を作ることにもなると思う。

スポーツは人生を楽しむための重要なツールである。多くの人とコミュニケーションがとれ、知り合える。健康にもなれる。私はバスケットのおかげで世界のあちこちを旅することができた。テレビでそれらの場所が放送されると自己満足にひたる。「行った！」